

『屋根の日本史：職人が案内する古建築の魅力』 原田多加司 著 (中央公論新社) iv,244p.

日本は2000年に及ぶ歴史の中で、数多くの代表的な寺社や城、住居を作り上げてきました。そうした日本の建物の多くを支えてきたのが木造建築という建築様式です。そして、その建築において切っても切り離せないのが本書のテーマである「屋根」です。

本書には、屋根職人でもある著者がその経験と知識を生かして、縄文時代から近代に至るまでの日本の建物、特に時代や建物の種類によって異なる「屋根」について書かれています。さらに、その建築様式やそれらの「屋根」が持つ効果、あるいは弱点などの構造的特徴、またそれらの「屋根」が作られた歴史的背景を述べています。建築にとって必要不可欠な「屋根」についての理解を深めることは、日本の歴史の中で生まれた建築文化の魅力を知る上でも重要なことでもあると思います。

524.85-Har

『新釈「蘭学事始」：現代語ですらすら読める』

杉田玄白 著 長尾剛 訳 (PHP研究所) 195p.

江戸時代の代表的な蘭学者の一人にして、『解体新書』の著者でもあった杉田玄白。彼が活躍し始めた当時、一般にはまだ蘭学は浸透しておらず、蘭学を研究していくことは生易しいものではありませんでした。しかも当時は、まともなオランダ語の辞書すらまだ日本には存在していませんでした。そんな中、蘭学という大海の真っ只中に飛び出した杉田玄白、前野良沢、中川順庵ら3人の学者たち。杉田らは『解体新書』の翻訳に端を発し、オランダ医学の解明や後学の育成に意欲的に取り組んでいきました。満足な辞書がないという不利な条件下、それでもひたむきに少しずつ歩みを進め、ついに目的を成し遂げ、蘭学の先駆けを築いた3人。本書ではそんな彼らの研究活動を面白可笑しく、苦勞あり笑いありといった様子で描いています。

402.105-Sug

『正伝野口英世』 北篤 著 (毎日新聞社) 301p.

野口英世は伝記などでもよく取りあげられている人物の一人で、御存知の方も多くいらっしゃると思います。しかし、私たちは野口英世という人物についてどのくらい知っているのでしょうか。人物の見方は時代によって、あるいは記述する人によって大きく変わることがあります。彼の人物像について、彼を支えてきた人々について、彼が偉業を成し得るに到ったその道程について、私たちは改めて見直してみる必要があるのではないのでしょうか。破天荒な性格を持ちながらも、常にがむしゃらなまでの努力を怠らず、我が道を切り拓いた英世。そして彼に振り回されつつも、彼を献身的に支え続けてきた周囲の人々。

本書では、野口英世やその身近にいた人々に関する描写は勿論、英世という名前に改名したエピソード、英世を含む会津出身者に見られる性格の特徴に関する分析など、実に興味深い話題も取り扱っています。野口英世を良く御存知の方にも是非お勧めの一冊です。

289.1-Kit



いながき ひろゆき (係)